



T o y D o l l s

～体験版～

その名の通り、彼らは玩具のお人形。
それも、性の玩具。
彼らには記憶もなく、ともすれば様々な障害を持つ。
日ごとに人数の減っていく彼ら。
謎は解けぬまま、主人公は飼い主に飼いならされ、性の奴隷
になっていく。そしていつしか、愛してしまうが・・・。

黒乃 大和 著

1. 覚醒

皮膚の上を、冷たく滑らかな指がすべっていく。
時折、胸の辺りの突起をゆるく愛撫され、ジンと腰へと電流が走る。
意識が混濁し、自分の身に何が起きているのか、理解する事が出来ない。
理解も、思考する事すらも彼には難しかった。
下半身に加えられる刺激に、身体が反り返る。
身体を中心に、熱い粘膜の絡みつく感触。
くびれをなぞるように舌が蠢く。
せりあがる快樂に、唇から声が漏れた。
声を堪える事もなく、波に翻弄されるがままに。
冷たく細いものが、快感のもっと奥に侵入する。
それが指だと認識する思考力はない。
体内で蠢く感触に、身をくねらせるだけだ。
執拗に抜き差しされ、本数が増やされ…。
それが引き抜かれると、代わりに熱く焼けるような楔が打ち込まれた。
足を大きく開かされ、身体が引き裂かれる。
彼は悲鳴に似た声をあげた。
それがすっぽりと収まってしまうと、淫らな音をたてながら律動が始まる。
彼は嬌声をあげた。
この感覚は初めてではない。
何度も繰り返し、慣らされ、快感にのたうつ様に教え込まされた。この快樂は、徐々に憶えたもの。
今は、この波に身を委ねる事が出来る。
誰も知らない者の、腰の動きが加速する。
彼は薄っすら眼を開いた。
だが、自分に照らされたライトのせいで、相手は暗闇に紛れ判別できない。
(———誰?)
いつも、闇に沈む相手。わかっているのは、細く冷たい指と熱い楔。自分に快樂を与えてくれるのは誰なのか。
そして、自分は誰なのか。
そんな思考も、激しい律動に翻弄され、霧散する。
体内をえぐる快感に、頭を振って応える。
熱い肉棒がある一点を刺激する度、彼自身のモノから蜜があふれ出す。
止まらない射精感が襲い、彼は律動にあわせて規則的な喘ぎを漏らす。
永劫に続くかに思われる、快樂。
とうとう彼の意識は、白い闇に覆われた。

その時、ノックの音が聞こえた。

「エメラルドをつれてきました」

「ああ。久坂もそこにいなさい」

久坂に伴われて入ってきたのは、昼間みかけた、意思の感じられない金髪の少年だった。

心なしか、顔が紅潮している。

（こんな顔、するんだ——）

ルチルは漠然とエメラルドの表情に見惚れた。

「ルチル、ちゃんと見ていなさい」

先生は、書斎の隅に置いてある、応接用のソファに移動した。

そこに座ると、おもむろに膝をひらく。

「さあ——おいで、エメラルド」

その言葉に吸い寄せられるように、エメラルドはふらふらと先生の膝の間にひざまづいた。

何も言われていないのに、自ら先生のズボンのジッパーを引きおろす。

下着の中から、先生の萎えたそれを引きずり出した。

エメラルドは、うっとりとして先生を見上げる。

「いい子だ——さあ、私を喜ばして」

エメラルドは、それをゆっくりと口に含んだ。

まだ柔らかいそれを、口全体を使って扱きあげる。

徐々に硬度を増していく先生のそれに、エメラルドは興奮を隠せない様子だった。

しきりと鼻から、甘い声を漏らしている。

さらに硬くなったそれを、おいしそうに舐め上げ、口に含み愛撫する。

唾液が溢れ、ぐちゅぐちゅと淫らかな音が響いた。

「ああ——上手だね。いいよ、とても」

先生の指が、エメラルドの金色の柔らかい髪に絡まる。

ルチルは——堪らなくなっていた。

（変だ——身体の奥が、あつい）

夜毎繰り返される饗宴が、ルチルの身体をそうさせたのか。

ただ、2人の口淫を見ているだけなのに・・・。

身体の、深い部分が疼く。あの楔で思う様突かかれたい。

自分の幹も、刺激が欲しい。

立っているのもやっとだった。

下半身も、胸の突起も、快感を枯渇して疼く。

「君は——本当に、美しい瞳を持っている。私は、君の様な漆黒の水晶の輝きを持った眼が、大好きなんだよ」

先生の顔が、ゆっくりとルチルに近づいた。

うっとり、ルチルの瞳を覗き込む。

「ああ——この輝きだ。私が求めて止まなかったもの」

先生の唇が、ルチルの柔らかなそれにかぶさる。

くすぐるようにルチルの唇を、舌がなぞっていく。

ルチルは不思議と嫌悪感を感じなかった。むしろ、待ち焦がれていた気さえする。

まるで、毎日、その口付けを受けていたかのような、慣れた感触。

ルチルはうっすらと唇を開くと、その舌を受け入れた。

先程までの警戒心や猜疑心など、どこかに忘却してしまっている。

ただ、この口付けに集中し、陶然となっていく。

「あ・・・ん・・・っ」

舌の動きに身体が甘く痺れる。

もう、何も考えられなかった。

優しい口付けは、次第に激しいものへと変化する。

舌を絡め合い、互いを貪る様な、熱い口付けへと・・・。

先生の手が、ルチルの背中へとまわされた。

パジャマの裾から、中へと忍び込む。

冷たく、細い指の感触。

（この指——僕を抱いていた人の——）

朦朧とする意識の中で、ぼんやりとルチルは考えていた。

だが、その思考も指の動きに翻弄され、どこかに消し飛んでしまう。先生の指が、背筋をなで上げる。

口をキスで塞がれていたため、甘い声は発することができなかった。

その代わりに、身体が弓なりに反らされ、ルチルが敏感に感じていることを示した。

指が背筋から、うなじのすぐ下辺りまで撫で摩る。

先生は唇をそっと離れた。

「いい子だね、ルチル。かわいい、私のお人形・・・。私が魔法をかけてあげよう。だから——

今夜は——おやすみ」

微かに、何か音がした。

ルチルの耳に、その音が届いた途端——ルチルの意識は、暗闇にのまれていった。



ハッピーエンドではありませんが、ちょっとSFっぽく仕上げ
ています。
久坂とタイガースアイのふたりも切ない、悲恋物です。